

Falke, Jacob von

Costümggeschichte der Culturvölker ; mitt 377 Abbildungen in Text und einer Farbendrucktafel.

Stuttgart, W. Spemann, [1881] (文献番号 3-17)

Hiler p. 302 Colas 1029 Lipperheide 88

ファルケ著

文化民族の服装史； 377の挿図と色刷り口絵 1枚付き

西洋服装史がようやく体系的な整いを見せてくるのは、ヨーロッパでも19世紀の60年代から80年代にかけてのことで、ティルケが指摘したように、その最初の基礎を築くことになるのがヴァイスの「服装学」(Kostümkunde 1860-1872) (文献番号 3-13)であった。彼はこの中で、衣服を文化生活と関連づけてとらえることを説いた。クレッチマー(Albert Kretschmer)の色刷り石版画とロールバッハ(Carl Rohrbach)のテキストによる「諸国民の服装」(Die Trachten der Völker 1860-1864) (文献番号 7-3)が刊行されたのもこれと平行してであり、その約10年後にはケーラー(Karl Köhler)の「中世・近代間のドイツ服装の発展」(Die Entwicklung der Tracht in Deutschland ……1877) (文献番号 3-276)が、また更に10年後の80年代にはファルケの本書及びホッテンロート(Friedrich Hottenroth)の「古代及び現代諸国民の服装・軍服・装身具・・・」(Le Costume, les armes, les bijoux, la céramique, 1886-1891) (文献番号 3-18)、続いてはラシネエ(Auguste Racinet)の「服装史」(Le Costume historique 1876-1888) (文献番号 3-20)が完結してこの分野での黄金時代を現出した。

ファルケの本書は、こうした歴史的経緯の中に誕生したが、彼は序及び緒論において次のようなことを述べている。すなわち、服装史は今日、かつて経験しなかつたほど人々の関心事となっている。……そのための服装に関する書物が続々あらわれてきたが、これは余りに画家の視点に立ちすぎたり、余りに広範囲にわたりすぎたり、色彩が豊かなために高価でありすぎたりで、興味をもつ人が簡単に手にすることも難しい。……手ごろで挿図も範囲も適当な概説書を意図したのが「文化民族の服装史」である。服装史は、物好きで奇をてらった歴史であったり、逸話集であったり、単に偶発的な要素をもつものだ、と考えられているのは誤りで、そうした精神を忘れた非科学的な方法は避け、一つの文化史として、原因と結果、生成と衰退の法則の発見がなければならない……と。第I部は古代の服装、第II部は中世、第III部は近代。第1章宗教改革時代の服装、第2章16世紀後半・スペインの風俗服装と流行、第3章30年戦争時代の衣服、第4章しゃし(奢侈)な仮髪時代の服装、第5章フランス革命時代の服装、第6章近代の軍服、第7章19世紀の流行、となっている。

文化史家ファルケ(1825-1897)はプロイセンのラッツェブルク生まれで、兄に歴史家J. F. G. ファルケがいる。